

2019年1月11日

シンポジウム「声を聴く 声をしるす 21世紀 教養教育考」開催報告 はしがき

間瀬 幸江

2019年1月11日、シンポジウム「声を聴く 声をしるす～21世紀教養教育考～」が宮城学院女子大学で開催されました。この企画は、同大学の一般教育部語学担当教員を中心に提出された、2018年度教育研究推進費研究課題「ことばを聴く ことばを育む—複言語・複文化主義と教養教育—」の関連企画として、キリスト教文化研究所との共催で行われたものです。大学での教養教育を問う議論が細分化し、その理念と方法論がともすれば切り離される傾向にあって、両者を切り離すどころかむしろ本質的連関を具現するような研究と授業実践を続けてきた、専門領域の異なるシンポジスト3名に登壇いただき、教養教育の基盤に「聴くこと」「しるすこと」を据える意義を考えました。学内外の教育関係者約30名、教職課程履修中を含む10余名の現役大学生も出席、世代や立場を越えた思索の場となりました。

まず、一般教育部長の田中一裕教授から「虫に聴く」と題した開催挨拶があり、続いてシンポジウム企画者である同部の間瀬幸江から「「聴くこと」の破壊力～共同研究の磁場～」と題して主旨説明を行いました。そのあと、3人のシンポジストによる発表「記録を読む、声を聴く—菅江真澄日記を題材にして—」（菊池勇夫・宮城学院女子大学名誉教授）、「『ことばの教師』に聴く—コミュニティにおける変容、継続性と価値の継承—」（今中舞衣子・

シンポジウム「声を聴く 声をするす 21世紀教養教育考」開催報告 はしがき

宮城学院女子大学教育推進研究課「こぼれ聴くこぼれ育むー複言語・複文化圏と教養教育ー」関連企画
宮城学院女子大学キナキ文化センター主催

2019年1月11日(金) 15時～18時 開場: 14時40分
宮城学院女子大学 講義館C 602教室

シンポジウム 声を聴く 声をするす
～21世紀教養教育考～

～パネリスト(登壇予定順)～

- 「古支書」に聴く(日本近世史) **菊地美夫氏**
宮城学院女子大学名誉教授
自治体史・職人文化史研究会理事
生活世界・国家・社会史研究会理事
愛媛大学経済学部の歴史学・地理学・文化学 教授
- 「こぼれ聴く」に聴く(言語教育) **今中彌衣子氏**
大阪産業大学准教授
論文「異文化言語教育の課題と今後の展望」(2017年)
日本外国語教育学会 50周年記念大会 特別講演 (2017年)
- 「子ども」に聴く(子どもの支援) **伊藤 芳絵氏**
工学院大学准教授
著書『子どもの支援』(宮城学院女子大学准教授・フランス学、国際教育)
大阪大学 協賛研究開発事業 (2017年)
調査で出会った子どもたち 第42号

【パネラー】 伊藤 芳絵 氏 (宮城学院女子大学准教授・フランス学、国際教育)
【MC】 一般教養 課長

◆**特別講演**◆ **事前申し込み不要**◆
Multilingual Workshops
Many Languages Welcome

宮城学院女子大学一般教養部
〒981-8501 宮城県仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1 (バス停「聖域学院前」から徒歩1分)

シンポジウム広報用チラシ表面

大阪産業大学准教授、「子どもの声を聴き、声に向き合うー災害後の支援者が直面した『ゆらぎ』と省察ー」(安部芳絵・工学院大学准教授)を経て、最後に40分間質疑を行いました。

本開催報告は、「声」をただ聴き、「声」を聴く側の解釈なしにただしるすという発想の基幹的価値を問うた企画意図を、まさしくただ「しるす」ことを念頭に置いて編みました。「声」が「文字」とは違い、主体の存在と聴き手の存在を、そして両者の共存を可能にする空間の存在を前提とすることを自覚し、一過性の出来事であるシンポジウムを、記録媒体である報告書へと

移し替えることの難しさと向き合った結果がこれです。また、報告の掲載順序は、シンポジウム当日の発表の順序通りとしました。

共催のご快諾をくださった、2018年度宮城学院女子大学キリスト教文化研究所所長の J-F. モリス教授に、この場をお借りして謝意を申し述べます。また、立案の段階から支援くださった菊池勇夫名誉教授から、2019年1月14日付でお預かりした「所感」を本報告書の「あとがき」に代えて掲載させていただきました。感謝申し上げます。